

たちばな新聞

寶清寺



あるかのような意識から、非人間的行為が頻発し、犯罪の多発に繋がっているのではないかと懸念。

秋のお彼岸には、ご家族そろって墓参り致しましょう。墓参用の生花は、管理事務所に用意してありますのでご利用下さい。

十月十二日午前十一時より当山本堂にて、お会式法要を厳修致しますのでご参拝下さるようご案内致します。

「身を養う」とは、経済や文化的活動によって、人が生きていく上で必要な「入れ物」をつくる作業を指します。「魂をたすける」とは心の営みのことで、「入れ物」に内容を注ぎ込み、充実させること

「身を養う」とは、経済や文化的活動によって、人が生きていく上で必要な「入れ物」をつくる作業を指します。「魂をたすける」とは心の営みのことで、「入れ物」に内容を注ぎ込み、充実させること

不安を感じるのは、この二つのバランスが崩れているからです。今、私たちは「身を養う」ことに使うエネルギーに見合うだけの「魂をたすける」心の営みを忘れていたことに気づき、真剣に考え、取り戻すための努力をしなければならぬ時を迎えているのではないのでしょうか。

安知分足

今年のお施餓鬼法要の後、恒例の住職一口法話で、現代は、「知足安分」が求められる時代ではないかというテーマでお話しさせて頂いた。右の色紙は住職が揮毫したもので、参列者多数の中から三人の方に贈呈した。私の書道の号は「観徑」なので、署名は「観徑書」とした。話が終わった後、「メモしておけば良かった」、「どのように書くのですか。」などの声が、多かったので、その時のお話を色紙と共に紹介することに致します。

住職ひと口法話 第三十九回

最近、「終活」という言葉を耳にすることが多い。「終活」とは、残りの人生をより良く生きるために、葬儀や墓・遺言、遺産相続など、元氣なうちに考えておくことで、三年前に週刊誌が使った造語で、映画「エンディングノート」で一躍有名になった。この意味だと自分の死後の紛争を避けるため、の意図が強いように思う。「徒然草」第三十七段に「桜の花は満開のときのみを、月は雲りのない満月だけを見るものであるか。(中略)今にも咲きそうな梢が、散って花がしおれてしまっている庭などにこそ見所が多い。」とある。また、山に登るといふことは、三つの要素がある。

前号の「たちばな新聞」の第三十八回の住職の法話で、日本文学の怪奇小説三部作を紹介した中で、大岡昇平作「野火」という作品は、戦争中、戦地で友軍と離れた兵士が究極の飢餓の中、友軍の兵士の肉を食べるといふ話です。作者が実際に戦地でインピンで体験したことを元に書かれた作品で、主人公田村が食料がなく極限の飢餓から仲間の人肉を食べるといふ、人としての道を外してしまつたという内容です。現代は、「危険ドラッグ」による他人を巻き込んだ車の事故、繁華街に車で突っ込んだ大量殺人事件、連続放火事件、夫婦や親子間の殺人事件、女兒誘拐監禁事件、児童虐待、収穫直前のトウモロコシ盗難、橋やトンネルのネームプレートを大量に盗むなどのように、今までは考えられなかったような事件が頻発していることに触れ、このような現代の傾向をスペインの画家

ゴヤが端的に銅板画で表現。その銅板画は、今まさに絞首刑にあって、縄でつるされている金歯をはめた男性の脇に、死体から顔を背け、金歯を取ろうとしている女性が描かれている。金歯は欲しいが、死体を見るのはいやだと顔を背けている画です。現代人は経済優先の社会で、金銭的豊かさを求めるあまり、いやなものには目を背け、自分の利益になるものにはむしやぶりつく傾向があるのではないだろうか。「戦争」や「お金」のために犯罪を犯すという特別な事件ではないにしても、自己の「保身」や「利益」のために、「うそ」や「画策」をして、人を貶めている人が多量にいます。以上の傾向をまとめてみると、二十世紀の前半は「戦争の時代」、後半は、「経済の時代」と言えるのではないだろうか。「戦争」のために、非人間的な犯罪が多量に起き、争い、非人間的な犯罪が多量に起き、たし、「経済中心」のために、お金が全て

であるかのような意識から、非人間的行為が頻発し、犯罪の多発に繋がっているのではないかと懸念。そこで、経済中心の現代人として心がけるべきは、「知足安分」、つまり、「足るを知りて、分に安んずる。」であり、二十世紀は精神が求められる時代なのではないだろうか。

日蓮聖人伝

「聖人の疑問」

日蓮聖人が、なぜ御出家されたか、その理由が明確に書かれた記録はありません。入山された十二歳の頃には、本人の意思で、仏門に入る事を両親に懇願したと考える学者もおりますが、仏教に関する造詣がそこまで深化した域に達する年齢ではないように思われます。現在の小学生は六歳で入学していることを考えると、入山には、勉強という意味合いが含まれていたのではないのでしょうか。この勉強の課程において、聖人の体内に眠る才能が研鑽され英知が露されたのでしよう。話が少しそれますが、清澄寺から少し離れた所に流石石(いせき)に流石石(いせき)の碑が建てられています。この碑の下に、聖人の母、梅菊女が幼い聖人とお会いした時に、その石に腰掛け涙を流したと言われている石があります。「一意志の固い聖人といえども、母の涙する姿を見て、幼い聖人も目を熱くしたことでしよう。このような話を聞く、十二歳の少年が両親と別れ山で修行することが、いかに心細い思いであったかかがわかります。

たかがうかがわれます。聖人が入山した清澄寺の御本尊は虚空蔵菩薩像です。「虚空の如く智慧の蔵がある菩薩」と言う意味で、聖人は後に日本第一の智者となし給えと願い、虚空蔵菩薩から大宝珠を授かったと記されています。ここで智慧とはなにを指すのかは不明ですが、虚空蔵菩薩求聞持法という修行法があり、記憶力を養う修法ですので、聖人は多くの教を記憶する術を会得したことを意味していると思われる。聖人は清澄で多くのことを学び、また多くの疑問にぶつかったことが、種々の方に送った手紙で分かります。寿命がなぜ尽きるのか、その無常観。お釈迦様の教えは一つなのに、なぜ多くの宗派が乱立しているのか。国内での飢饉や疫病、政治に対する不安と豪族の争い、内憂外患の原因はどこにあるのか等、多くの疑問が生じた。聖人は、清澄寺で授けられた智慧により、湧き起った疑念を解決すべく、清澄寺を後にし、幕府の中心地である鎌倉への遊学の旅に出発します。



とを学び、また多くの疑問にぶつかったことが、種々の方に送った手紙で分かります。寿命がなぜ尽きるのか、その無常観。お釈迦様の教えは一つなのに、なぜ多くの宗派が乱立しているのか。国内での飢饉や疫病、政治に対する不安と豪族の争い、内憂外患の原因はどこにあるのか等、多くの疑問が生じた。聖人は、清澄寺で授けられた智慧により、湧き起った疑念を解決すべく、清澄寺を後にし、幕府の中心地である鎌倉への遊学の旅に出発します。

宝清寺の草花

秋の七草でフジバカマという花がある。宝清寺には群生していないの、十月に見ごろになるので、その時期に御参拝にいらしゃったら探してみたいかですか。花は黄色で花弁が筒状で、花の中心は赤い。宝清寺では、初詣にお越し頂いた方に「家運昌隆」をお授けしております。また「日蓮宗御寶札」も合わせて配布しております。「家運昌隆」は家族皆様の繁栄を祈ったお札です。家族皆様が集まる居間や、玄関の内側などに祀りください。



お彼岸の案内

今年のお彼岸の中日は九月二十三日です。お彼岸は昼夜の長さが同じになり、先祖供養が浄土に届きやすくなる時だと言われています。また、秋風が聞こえてくる彼岸には、急情になりがちな時期でもあり、心を引き締めなおし、ご先祖様への感謝を込めて、お墓参りにご参りください。

お会式

十月十二日(日)午前十一時より「お会式」法要を厳修致します。お会式は、日蓮聖人の徳を並び、ご先祖様に対して報恩謝徳をあらわす行事です。現代人は忙しい日々を送っています。その忙しさにかまけて、人や物に対する感謝の気持ちが薄れがちになります。毎日の糧を頂くことや、健康でいられることへの感謝の気持ちをおこす意味でも、お会式に是非いらしてください。

お盆締札

【お盆締札の御案内】少し先の事になりませんが、年末はお札の取り替え時期です。涼風が聞こえてきたら、ご準備ください。お盆締札とは、年末にお祀りする各種のお札の総称です。年末に頒布するお札には、台所の神様である「普賢三寶菩薩」様や、便所などの不浄な場所にお祀りする「烏羽紗摩明王」様が祀られます。また、神棚のしめ縄につける幣束や井戸を

日蓮宗御寶札

【年始の御案内】宝清寺では、初詣にお越し頂いた方に「家運昌隆」をお授けしております。また「日蓮宗御寶札」も合わせて配布しております。「家運昌隆」は家族皆様の繁栄を祈ったお札です。家族皆様が集まる居間や、玄関の内側などに祀りください。

浄行菩薩 絵馬頒布中

交通安全 交通安全 交通安全

日蓮宗の聖日

宝清寺 宝清寺 宝清寺